

# 多読指導の Second Step

## —読解スキルを利用して—

磯部 達彦

### 1. 多読はブームだったのか？

ここ数年の巷での音読ブーム(?)の影響を受け、私の勤務する高校でも、最近さまざまな手法での音読が行われている。音読は学習した英語を定着させるには有効な方法で、私も実践者のひとりだ。

ところで、一昔前までよく話題に上っていた英文多読指導はどうなったのだろうか？音読ブームの影に隠れてしまったのか？それとも、「朝読(朝の読書)」が多くの学校で実践され、特別なことではなくなったのと同様、英文多読指導も定着してきたために以前ほど話題にならなくなったのだろうか？

本稿では、自由読書形式による多読指導の次のステップとして、高校の授業内での英文多読指導について述べたい。

### 2. これまでの本校での多読指導

13年ほど前から、英語科の部屋にある生徒用の読みものを貸し出し、生徒に自由読書を勧めている。初年度におこなった研究により、「多読学習により、生徒は英文を読むのを苦と感じなくなり、英語が好きになる傾向がある」ということがわかった。これが多読による最大の収穫である。

しかし、反面、自由読書の運営には困難点も多い。例えば、かなりの数の脱落者が出る。最初は多かった参加者も物珍しさがなくなり、国語の感想文提出などと重なると本を借りに来なくなる。また、授業を担当している教員の熱意に大きく左右される。そこはやはり高校生なので、授業担当者が熱心に勧めているクラスの生徒はよく借りに来るのである。貸し出し制による自由読書では、英語が好きではない生徒を振り向かせるには限界がある。

### 3. 「英文多読」という授業

多読指導のやり方もわかってきたところで、2006年度より2年生の文系選択者に対して、必修1単位

で「英文多読」という授業を立ち上げた。現在の授業では、1授業時間のうち前半は教員が与えた課題を読ませ、後半は読みたい本を選んで自由読書させている。

### 4. 「英文多読」の自由読書

希望者に本を貸し出して多読指導をする時の留意点は、「英語の難易度の低いテキストを多くそろえる」、「辞書はなるべく引かない」、「読んでいる途中で興味がなくなったら、読むのをやめて別の本を選びなおす」というもので、つまり「やさしい英語をたくさん読んで、嫌になったらやめてよい」というスタンスであった。

しかし、高校の「授業」となるとそう単純ではない。文系の生徒だといっても、英語専攻の大学生ではないから、全員が英語好きというわけではない。

英語が好きな生徒は、英語を読むこと自体が好きなので、やさしい英語であっても、英語の表現方法・言い回しなどにおもしろさを見つけ、楽しんで読む。ところが、英語が好きではない生徒は、内容への関心がないと、わざわざ英語で読もうとはしない。「英語が不得意な生徒にはやさしい英文を与え、得意な生徒には少々難しい英文でも大丈夫」という従来の考えがここでは逆転してしまう。

また、「評価」もしなければならない。読書レポートを提出する際、童話や昔話などあまり簡単な本を選ぶと、レポートの書き様がない。レポートが書きやすい本となると、必然的にある程度の難易度の本になる。提出期限に遅れないようにレポートを書くには、途中で本を変えている暇はない。また、最後まで読んではじめて問題が解決する本もあり、読み終えるということが重要になる。

実は、自由読書では興味づけが最大の課題で、ここをうまくクリアーすると、生徒は英語の得意・不得意にかかわらず、よく頑張って英語を読んでくれ

る。「英語好きの生徒にはおもしろい表現を含む本を勧め、英語嫌いの生徒にはおもしろい内容を含む本を勧める」のがひとつの策である。

## 5. 「英文多読」の課題読書

ところで、授業の前半で読む課題プリントについては、それが実際に使われている英文であることと、ある程度の知的レベルのある内容であることを目指している。

また、この「英文多読」のクラスにいる生徒は、全員必修1単位の「時事研究」という授業も受けている。この授業では英語・社会・国語の3名の教員がティーム・ティーチングを行っており、筆者はこの授業も担当している。ここでは、「英文多読」の時間に読む英文の内容と、「時事研究」の授業とがリンクするように心がけている。

例えば、「英文多読」では、実際に使われている英語として英字新聞を読み、知的興味を覚える記事を探す。そして、「時事研究」でその内容について、さらに知識を深め、最後に自分の考えを発表する、などである。

## 6. 読解スキルの活用

内容理解を中心にすえて「英文多読」の授業を進めていく時に役に立っているのが、『Skill Builder スキルで読み解く英語長文』でも取り上げている6つのスキル、phrase reading、文のつながり、推測、予測、skimming、scanningである。多読なので、paragraph reading、skimming、scanningが役に立つのは当然だが、推測、予測も、辞書を使わずすばやく読む時、次に何が書いてあるかを予想しながら批判的に読む時に役立っている。

また、英語Ⅰ→英語Ⅱ+「英文多読」→Readingという本校での3年間のリーディング指導の流れを考える場合、phrase readingや文のつながり、などの読解スキルは、低学年の頃から少しずつ慣れておくのが有効である。

## 7. 1学期に読んだ課題プリント例

次に、今年の1学期に「英文多読」の時間に読んだ課題をいくつか紹介する。

### ① 村上春樹氏の「エルサレム賞受賞スピーチ」

4月の最初に読んだ。これを選んだのには、筆者

の趣味もかなり入っている。日本人作家の書いた英文原稿ということもあり、生徒も親近感を抱いたようだ。また、3ヵ月後に『1Q84』が大きな話題になったことも、生徒にはうれしいことだった。

### ② Oxford History for GCSE のシリーズのうち The Modern World から「パレスチナとユダヤ人」

村上氏のスピーチの背景を探るという意味と、英国の高校生が使っている教科書を読むという2つの意味で読んだが、生徒になじみの薄い語彙が使われており、また、内容も生徒にはやや難しかったようだ。しかし、ひとつの歴史を他国の視点から読むのは、多角的なものの見方を身につけるという意味で貴重な経験になるだろう。今回は、英語を母語としない国の、英語教科書を読むことを予定している。

### ③ 英字新聞 *Herald Tribune* の「身の上相談」

読者からの相談の部分だけを先に読み、自分が相談役ならどう答えるかを翌週までに書いてくることを宿題にした。翌週、新聞の相談役の回答を読む。文筆業ではない一般読者の書いた英文なので、読み易い面と読みにくい面があり、生徒にはそこが面白かったようだ。ただし、授業では扱いにくい内容の相談が多いため、適当なものを探すのに少し時間がかかった。

## 8. おわりに

10数年前、多読指導の研究成果をある研究会で発表した時、知り合いの先生から「生徒が自由に本を借りて読むだけなら、そのどこに指導と呼べるものがあるのか?」という意味の質問を受けたことがある。確かに、生徒が自分で本を借りて自分で読むという行為だけ見れば、そこに読解指導は存在しない。しかし、どんな本を用意するかを決める、どの生徒にはどんな本を推薦できるか知っておく、読解のスキルを教える、適切な評価を行い次の読書への動機付けを強化するなど、やはり、多読には指導が必要である。

今年は、第1学年のHR教室に英語図書を数十冊ずつ設置できることになった。英語科以外のHR担任からも、生徒に英文多読を推薦していただく。これを、2年次での「英文多読」にどのようにリンクさせれば良いか、機会があればまたご報告したい。

(京都教育大学附属高等学校教諭)